

「江差追分」と私

高 井 收

1. はじめに

平成23年7月9日（土）に行われた小樽商科大学の創立100周年記念「小樽商大緑丘百周年祭」に他の北海道民謡と共に民謡「江差追分」を披露させて頂いた。以前から私が趣味を兼ねて民謡に親しんでいることをご存知であった副学長の大矢先生から、百周年記念におけるこの企画の打診があった時には、本当に名誉な気持ちになり、二つ返事でお受けした。

この「江差追分」は小樽商大と全く関係が無いわけではなく、小樽商科大学『学園だより』No. 156でも紹介されているように、第2次世界大戦中、小樽高商の卒業生であった牧野顕吉さんはフィリピンで特攻隊員としての出陣前夜、NHK「前線に送る夕べ」というラジオ番組のインタビューの中で、「江差追分」を唄われている。小樽商大図書館に残されている資料集『追分の謡消えず』から一部引用してみる。「父上、兄上、弟よ、顕吉はいま神国永遠の繁栄を一身に背負って任務に飛び立ちます。・・・弟よ、火薬の研究はどうだ。死力をつくして頑張ってくれ。弟よ、自分が夏休暇で北海道より帰った時、よく口ずさんだ江差追分だ。聞いてくれ。『煙る渚に 陽は黄昏れて 沖に江差の 灯がともる』では、父上、兄上、弟よ、元気で。」こうして、牧野顕吉さんはレイテ島に向かって飛び立っていった。また、牧野さんが唄ったこの追分について、館和夫氏は北海道新聞社（1989年2月28日）発行の『江差追分物語』の中で、木内宏氏の『賽の河原紀行』（朝日新聞社）から引用して、牧野顕吉少尉が出撃の際唄った文句は市川天涯作の「けむる渚に 日はたそがれて 沖にいさりの 火がともる」であったとも述べている。

2. 「江差追分」とは？

文献などを見てみると、その由来について一応、現在通説として伝えられているのは、江戸時代の中頃、中山道と北国街道の分岐点にあたる追分宿（現在の軽井沢町字追分付近）で唄われていた「馬子唄」が始まりであると言われている。

また、檜山郡江差町にある江差追分会館の二階に上がって行くと、資料館があり、その入口に「江差追分」の由来が書かれている。それによると、「近世の初めから中頃にかけて、信州の追分宿あたりに起こった馬子唄（追分節）に始まるという。宿場の女や警女達の三味線にのせて唄われた追分節は、やがて越後方面に伝わって松前節（越後追分）となり、さらに北前船の船子たちによって、当時、松前三港のひとつとして繁栄をうたわれた江差に運ばれた。

北国のきびしい風土のもと、懸命に生きる人々の心情を反映したその唄は、やがて日本民謡の白眉といわれる大輪の花、江差追分となって開花した。

天明の頃に始まり、天保の頃、座頭佐ノ市が謙良節（越後松坂くずし）を加味して大成したと伝えられるこの唄は、人の世の浮き沈みや哀歓を象徴し、人々の心をつなぐ万人和楽の唄として愛好されている」とある。この「江差追分」は一種の労働唄「馬子唄」として生まれ、海を渡ることによって波を表現するメロディーが加わり、幾多の変遷をとげていったと考えられる。そして、明治

42年に「正調江差追分」が生まれ、「7節、7声、二声上げ」という唄の決まりが定められ、現在に引き継がれている。「7節」と言うのは本唄を7つの節に分け、その間は節の切れ目に息をするだけで、1節を一息に唄うことで、「7声」「二声上げ」と言うのは音調（譜）の種類を指し、この8種類のメロディーで「江差追分」の唄は構成されていると言われている。また、馬川政紀氏は会報ヤンサノエ（2012年No. 17）で「江差追分は、・・・現在、全国、海外159支部、3600人の会員で組織されている江差追分会によって保存・伝承されている。この追分会が昭和38年に第1回江差追分全国大会を開催してから今年9月には半世紀50回の記念大会を迎える」と述べている。

3. 文化としての「江差追分」

この「江差追分」が昭和52年に北海道無形民俗文化財に指定されたことは本当に喜ばしいことだ。文化とは一つに、あるグループ集団によって共有される価値観、世界観であると考えられる。以前、小樽商大の言語センター広報（第16号）「異文化コミュニケーション研究の英語教育への取り組み（2）」でも述べたが、日本語の7、5調のリズムは日本人にとって心地よいリズムとして受け入れられる。それに加え、自然との調和を尊ぶ文化は我々が共通して持っている世界観ではなからうか。「江差追分」の哀調をおびたメロディーは人々の心に「何か」を訴えていると思われる。毎年、江差追分会館で行われる「江差追分セミナー」では「江差追分」の由来を含め、「正調江差追分」（「江差追分」とも言う）の本唄の唄い方を指導している。本唄は7節（約27文字）を2分40秒ぐらいの目安で唄うことになっており、いかに、無駄なものを省き、研ぎ澄まされた唄にしなければならないか想像できる。ここに、自然との調和と同時に日本古来の「わび・さびの文化」に通じるものがあると言える。

ここで、この道の第1人者と言われる江差町にお住まいの青坂満師匠に、「江差追分」を唄う時の師匠の思いをお伺いしたので紹介する。青坂師匠は昭和43年第6回江差追分全国大会で優勝され、昭和49年には江差追分会本部会「鷗声会」を結成された。そして、師匠は昭和57年に江差追分功労表彰を受賞された。私も今年からこの名誉ある鷗声会の一員として、師匠から「江差追分」の手ほどきを受けている。

平成24年6月27日青坂師匠に聞く。

「師匠は江差追分を唄う時、何をイメージしていますか？」

「私はやっぱり海だと思うね。舟に乗って海の上をダーと波に押されていくとき。あとはやっぱり自分の思っていることだね。今頃どうしているだろうとか・・・。人間と言うのは常に空想、『念』というのをもつとる。その思いをグーとくる波に乗せると両方がマッチするから合うのではないかと思う。歌詞にも『かもめ』と『忍路』とがあるが、『忍路』のほうは男女の思いが込められている。『かもめ』のほうは舟の長旅にやっと大島が見えて『あれが蝦夷地の山かいな』と安堵の念を表したものである。」

ちなみに、ここで師匠が仰っている「忍路」と「かもめ」の唄は「江差追分」の歌詞の中で最も一般的に唄われる文句である。参考までにその2つの歌詞をここに紹介しておこう。

「忍路 高島 及びも ないが せめて 歌棄 磯谷まで」

「かもめの 鳴く音に ふと目を さまし あれが 蝦夷地の 山かいな」

こういった歌詞については、その時代、その頃の社会等を反映して文句が考えられているが、「忍路」の歌詞は、かつて松前藩が神威岬から、その以北にかけて女人禁制を定めたことによるものであり、「かもめ」の唄は船乗りの望郷の念に思いを込め、長い航海の末、やっと陸地が見えた安堵

江差追分と私

の念を表したものとされている。この他にも、最近起きた東日本大震災の追悼歌として作られた「鎮魂追分」（千葉栄人作詞）がある。次にその本唄を紹介する。

「呼べど 叫べど 無情の 風に 愛し 我が娘は 波の底」

この唄の前唄には「弥生三月 リアスの浜にヤンサノエー 黒い牙むく 大津波 助けておくれよ 此の世の地獄ネ 神も仏も ないものか」とあり、生々しい津波の現状が良く伝わってくる。そして、後唄には「涙こらえて 磯辺に立てばネ 望みひとすじ 彼岸花」と唄われ、復興の意気込みが詠み込まれ、大震災を目の当たりにした我々には深い感動を与えずにはおかない。この作者の千葉栄人さんは平成元年第27回江差追分全国大会にて優勝されており、岩手県出身で、ご自身も被災者の一人である。昨年の江差追分全国大会のアトラクションにこの「鎮魂追分」を前唄、本唄、後唄と通して唄われた時には、会場一面、深い感動と涙に包まれた。

青坂師匠にお話を伺ったその日に、幸運にも、もう一人、「江差追分」の師匠からお話を伺うことが出来た。江差町在住の昭和50年第13回江差追分全国大会で優勝された高清水勲師匠で、「江差追分は人々の生活を映し出し、先人の思いを伝えるものである。人と人との思いやり、人に対する信頼関係が大切である」と話してくれた。

文化の特徴の一つに「学ばれ、伝承されるもの」と言うのがある。先人の思いが伝えられ、その価値観が「江差追分」を通して引き継がれて来たのであろう。それだからこそ、聞く人に深い感動を与えずにはおかない。

4. 「江差追分」との出会い

以前から民謡には興味を持っていたが、「江差追分」に関しては北海道に来るまで全く知らなかったと言って良い。縁があって私は昭和57年8月から2年間、小樽商大のLLで助手を務めた。その頃は、日本語教授法を学ぶために、オレゴン大学の大学院を休学して一時帰国していた時期である。是非、一度民謡を正式に習ってみたいと思い、小樽の手宮で民謡を教えている芦崎義信師匠を訪ねた。その時に芦崎師匠が唄ってくれた北海道民謡の一つが「江差追分」であった。間近に聞く追分に私は圧倒されてしまい、それと同時に「自分も是非この江差追分を唄ってみたい」と思わずにはいられなかったことを覚えている。その後、「江差追分」歴代優勝者の唄声が入ったCDを買い、その中でも、特に青坂満師匠の「江差追分」を聞くようになった。

青坂師匠の「人間と言うのは常に空想、『念』というのをもつとる。その思いをグーとくる波に乗せると両方がマッチする」というお話の通り、「江差追分」には波をイメージさせるメロディーがあり、息の使い方により余韻を残した表現方法があると考えられる。そして、その根底には唄う人それぞれの「思い（念）」が秘められているのではないだろうか。私は「かもめ」の本唄を唄う時、20代中頃から30代を過ごしたアラスカでの生活が思い浮かぶ。学費と生活費を稼ぐため、大学の夏休みには浜の缶詰工場に出稼ぎに行き、仕事の合間をみて、海岸から海をながめ、望郷の念に浸っていた自分が思い出される。

このような望郷の念は日本人だからというのではなく、洋の東西を通じて、人間だれしも同じ「思い」を持つものではないかと考えられる。ちょうど平成21年9月5日に第48回大学英語教育学会(JACET)の全国大会が北海学園大学で行われ、懇親会の席で「江差追分」（英語の字幕、説明付き）を披露させて頂いたが、その直後、カナダ人の教授が私の所に来て、興奮気味に「『かもめの鳴く音に ふと目を さまし あれが 蝦夷地の 山かいな』の一部を『あれが カナダの 山かいな』と言い換えればどの国にでも通用するし、本当に共感の持てる唄だった」と言ってくれた時

の彼の顔は未だに忘れない。

5. おわりに

大学で異文化コミュニケーションをテーマにゼミナールや授業を教えているが、「異文化を知るには、まず、自文化を知れ」という言葉がある。私も同感だ。文化を知るにはいろんな方面からの切り口があると思うが、私にとって民謡は自分の心の故郷のように感じる。今は、この「江差追分」に出会うことが出来て本当に幸せである。